
らいふ いず りぼ〜ん

GETTER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らいふ いず りぼん

【Nコード】

N9504C

【作者名】

GETTER

【あらすじ】

本編『LifeIsReborn』の番外編集です。本編では語られなかったギャグ中心の話を、とくにご覧あれ。

第1話【勝負ってのは、いつも真剣にやらないとな】

【SIDE：俺】

「この時を待っていたアル」

「ちっ、俺は別に待ってねえけどな」

ここは麻帆良学園のとある広場。そこで俺は勝負大好きの中国娘、古菲と対峙していた。

周りには観客が大勢おり、古菲を応援している者もいれば俺を応援している者もいる。

そもそも何故こんな事になったのかと言うと……話は数時間前に遡る。

<数時間前>

「剣山ーッ!!」

「あっ？ 何の用だよ」

退屈な授業の1時間がようやく終わったので、俺は次の授業に向けての気分転換に、廊下をブラブラしようと思っていた。

すると突然、大声出しながら俺の方へ走ってきた古菲が、俺の胸ぐらを掴んだ。

テメツ、いきなり胸ぐら掴むなんて何を考えてやがる!?

「いつになったら私との勝負を受けてくれるアルか!」

「あああああ……」

大声をあげて俺の首をガクガクと揺らし始めた。

脳みそがまるで勢いよくシェイクされる感じがした……。

「俺の頭をパーにする気か!? だから前に言っただろッ! 暇が無いって!」

「いつとも暇が無い、暇が無いって……そのパターンはもう飽きたアルよ」

「ぐっ……」

パターンって……俺ってそんなに言ってたっけ?

だが俺は急激に増えた同居人の世話があるから古菲の勝負には付き合ってやれないのだ。

まあ、前の勝負の約束もコイツが一方的に取り付けただけだから俺が付き合っただけやる道理は無い。

「ともかく!! 俺はお前の勝負事に付き合う時間は……」

「まあまあ、そう言わずに古の頼みを聞いてあげてほしいでござるよ」

俺が言おうとしたのを防ぎ、長瀬が乱入。

大親友である長瀬の協力もあって古菲の顔には笑顔が浮かんでやがる。

そんなにコイツは俺と勝負をしたいのかよ……。

「そうよ。前々から古ちゃんが生懸命頼んでるんだから、頼み事

の一つくらい聞いてあげなさいよ」

ついに神楽坂も乱入しやがった。そう言えばコイツ等って3・Aの中で特に成績が悪い『バカレンジャー』とか言う仲間だったな（ちなみに佐々木と綾瀬もバカレンジャー）。

やはり同類は同類を庇うのだろうか……。

「アスナも楓もありがとうアル。やっぱり同じバカレンジャー仲間である私を放ってはおけないアルか？」

長瀬は「ニンニン」と真意が読めず、神楽坂は「そういう理由じゃないわよ!!」と激しく否定。

やっぱり俺、コイツ等の事はいまいちよく分からねえ。

「で、どうするアルか？」

三人のバカレンジャーが俺に迫ってくる。
妙な威圧感も感じるのは気のせいかな？

ハッ、俺ってトコトン不幸だぜ……。

「分かった分かった。受けるよ、その勝負を受けりゃいいんだろ！」

どうも俺は迫られると弱いと言うか、女は苦手と言うか、最終的には折れてしまう。

精神修行も近い日にやるべきだろうか。

「受けてくれて嬉しいアル。日時と場所はどこにするネ？」

「今日の放課後だ。場所は近くにある広場で良いだろ。そこなら広いし、戦いやすい」

古菲が「了解アル。いや、放課後が楽しみネ」と言い、教室を出て行った。

そして俺は脱力し、溜め息をつきながらせつかく立った席にすぐ着いた。

「古はなかなかの使い手でござる。油断は禁物の、手強い相手でござるよ」

「けっ！俺があんな勝負大好き娘に負けるかってんだ」

負けない自信はあるのだが、実際に古菲が戦っている所を俺は見た事が無い。

“ちゅうごくけんぽー”とか言うのを使うらしいが、どんな強さなのかは未知数だ。

だが、勝負を挑まれたからには男であろうと女であろうと全力で行かせてもらうまでだ。

それが男の、1人の戦士としての礼儀ってもんだ。

「うんうん。拙者もこの勝負、見物させてもらうでござるよ」

「マジか……？」

そして冒頭に至る訳だが……これだけ周りに観客が居るとやりづらいな。

今まで俺が体験してきた戦いってもんは、こんな感じじゃ無かった

訳だし。

「頑張れー！！ 菲部長ー！！」

「そんな奴なんか簡単に負かしちまえー！！」

くそ……野次馬が、好き放題言いやがって。

あいつらを勝負が終わった後でぶん殴ってやるのか？

それだったら顔を覚えておかなくちゃいけないな。

「「ファイトー！！ ケンくーん！！」」

「応援してるでござるよ。剣山殿」

俺の後ろからは聞き慣れた声であるチビ双子姉妹と長瀬だ。

人混みの中をよく見ると3-Aの奴等が結構いるなあ。まったく、お祭り好きな奴等だぜ。

「さて、始めるアル。お互い良い勝負をするアルよ」

「良い勝負になるか分からないが……ともかく、さっさとやるか」

俺の言葉と同時に古菲が構えた。変な構えだが、あまりスキが見えたらねえな。

人間は時々本当に面白い事をやりやがる。

対する俺は構えなんか無いに等しい。

戦場じゃあんな構えなんかしていたら真っ先に狙われるのがオチだ。

「ハッ！！」

古菲が掛け声共に素早い動きで俺の正面に立ち、顔面目掛けて肘で打つ。

俺はそれを片手で受け止め、顔面に直撃するのを防いだ。

「いきなり顔面狙いとは大胆だな。これも“ちゅうごくけんぼー”とか言う物の教えか？」

俺は問うたが、古菲は無言で次の攻撃にと掴まれている腕で仕掛けてきた。

だが、甘い。

これも俺は軽々と受け止めた。

これでお互いの両手が使えなくなった。

「押されてばかりじゃ情けないんでな。反撃させてもらっぜー！」

俺は掴んでいた古菲の両手を離し、回し蹴りで攻撃を仕掛けた。

回し蹴りは古菲の顔面を捉えていたが、古菲はそれを両手で受け止めた。

常人なら反応出来ず、喰らっている所だが、流石はけんぼーの使い手だけある。

「くっ……気も使っていないのにこの蹴りの威力は反則アル」

「受け止めたのは素直に褒めてやるぜ。喰らったら、顔の形が変わってるぞ」

気……か。

そういえば前にタコじじいや高畑に気について教えて貰った事があったな。

教えてもらったのは良いが、さっぱり理解出来なかったけど。

しかも今では全部忘れてるからよけいに訳が分からないしな！！
威張ることでもねえけど。

「私もやるアルよ！！」

受け止めていた足をはらい、連打を打ち込んでくる古菲。

周りから見たら目にも止まらぬ速さの攻撃だが、俺にとっちゃ生ぬるい。

全て避けるか手ではらい除ける。

「ホラホラどうした？ それじゃあ俺に一撃も喰らわせられないぞ」
「くっっ！」

この手の接近戦パターンはコンボイやライノックスとの模擬戦やシミュレーター、数々の実戦でマスター済み。つまり、避けるのは造作も無い事なのだ。

このまま一気に決めてやるか。

そう思った俺は若干のスキが見える脇腹に狙いを定め、攻撃の準備をする。

避けながら確実にタイミングを待つ。

「ヤッ！！」

今だな。

古菲が正拳を打ち入れる際に出来た僅かなスキ。それを見逃すほど俺は甘くない。

古菲の正拳を受け流し、俺は脇腹に素早く、的確に手刀を打ち込む。

手刀を選んだのは正拳よりかはダメージが少ないと思ったからだ（あくまで俺の勘だが……）。

「させないアル!!」

そう言うとき古菲は脇腹寸前まで迫っていた俺の手刀をはらった。いけね……思わぬ反撃に注意が逸れちゃった。

「ヤアー!!」

俺の腹部に強い衝撃が走った。注意を逸らし、スキを見せた俺に古菲が正拳を打ち込んだ。しかも威力は今までとはケタが違った。この正拳に全てを掛けたかのような威力だった。

結構な衝撃に俺はその場に立ちつくす。

吹っ飛ばされはしなかったが、一点に凝縮された力って奴はかなりの厄介だ。

しかし、打たれ強い俺にとってはこのぐらいの衝撃は何10秒か経てば回復する。

動かない俺に勝利を確信してそうな古菲には、とても悪いがな。

「今のは……良い攻撃だった。だが、俺を倒すには全然足りねえ」

俺が言葉を発したのに酷く驚いている様子の古菲。俺は体制を立て直し、一気に詰め寄る。

正面まで迫った所で古菲の頭を思いきり掴み、地面に押し倒した。周りから悲鳴に似た声があがる。やかましい事この上ないぜ。

「俺の勝ち、だな？」

掴んでいた頭から手を離し、体全体に体重を掛けて四肢の動きを奪う。

元々俺と古菲の体格差は倍以上なので抑えられたら身動きはまず取れない。

最初は何とか逃げたそうともがいていた古菲だったが、諦めたのか、抵抗を止めた。

「まいったアル。私の完全な負けネ」

屈託のない笑顔で言いやがるなコイツは。古菲の敗北宣言により、勝負は終了。

野次馬は負けた古菲に激励の言葉を贈りながら去っていった。

所でよ、何で勝者の俺には一言も無いんだ？

「いやいや。剣山は本当に強いアルな。どうすればあんなに強くてあんなに打たれ強くなるアル？」

「日々の特訓を積み重ねりゃ、誰でもなれる。……女がなれるかどうか分からないけど」

強くなる為には特訓は欠かせない。

しかし俺の打たれ強さを身に付けるには……1回TFになれば身に付くぞ、古菲よ。

「負けてしまったが、ダイノにはまた勝負を挑みたいネ」

「なら今日よりももっと強くなってから挑んでこい」

頬を膨らませながら「解ってるアルよ！」と言う古菲に俺は思わず笑ってしまう。

コイツの顔って、意外に面白い。

「お疲れ様でござる。2人共」

「なかなかの勝負だったな」

長瀬と龍宮がタオルとドリンクを俺と古菲に渡してくれた。正直ありがたい差し入れた。

長瀬が見ているのは知っていたが、龍宮まで見ているとは思わなかった。

俺が渡されたタオルで頭を拭いていると古菲がドリンクを落とした。

見ると両手が微妙に震えている。

「手が痛いのか？」

「少し痛いだけアル。気にしないで良いヨ」

平気そうに手を振っているが、かなり辛そうだ。

恐らく原因は俺の蹴りを受け止めた時だろう。

勝負に夢中で気付いてやれなかったが、痛めていたのか。

「ふむ、骨は折れていないようだが、医者に診てもらった方が良いかもしれないな」

「まずは保健室に行って手当でござる。拙者が運んであげるでござるよ」

長瀬が古菲を背負おうとしたが、こうなったのは俺に責任があると思っ止めさせた。

持っていたタオルを肩に掛け、俺は古菲を持ち上げた。

「け、け、け、剣山!？」

「何だよ？　あまりジタバタ暴れるな」

俺が持ち上げた体制は前に早乙女に“おとことしてのたしなみ”として教えられた物だ。

名前は確か……“おひめさまだっこ”だったか？　妙な名前だったのでよく覚えている。

「ほれ、行くぞ。ワタワタ暴れるな」

「りよ、了解アル……」

顔を真っ赤にして頷く古菲。腕のケガの他に熱も出たのか？　それと何で長瀬と龍宮は固まったままなんだ？

……ん？　動き始めたが、目に殺意みたいな物が宿ってないか？　ここには敵も何もいないぞ。オーイ、オーイ。

第2話【蜘蛛男、ご登場】

【SIDE：エヴァンジェリン】

今頃修学旅行に行った連中は何をしてるのだろうか。

私はこの身に掛かる呪いのせいで修学旅行には行くことができない。

だが、剣山が京都・奈良の土産を買ってきてくれると言ってくれた。

それを楽しみにして、連中が帰ってくるのを待つとしよう。

「まったく。あのじじい……調べ物をしている最中に呼び出しおつて」

私は今、じじいに急に呼ばれて学園長室に向かっている。

当然、私の後ろには、従者である茶々丸が付いてきている。

剣山から預けられたミュウとジャガーは私の家で留守番。

「じじい！ 来てやったぞ。一体何だ？」

「おお、待っておったぞ」

相変わらず人外の姿をしてるじじいだ。

ドアを乱暴に開けて部屋に入り、私は近くにあった椅子に座った。

「実は麻帆良大学の工学部にな、新しく研究員が入る事になったのじゃ。各先生方にも了解は取ってあるし、ワシも彼と話し済みじゃ」
「それがどうした？ 新しく入れるなら勝手に入れる。私には関係ない」

そう斬り捨てると、じじいは髭を撫でながら、苦笑した顔で口を開いた。

「それがちと気がかりでの。その研究員からは、剣山君やミュウ君と同じ力を感じるんじゃないよ」

私は一瞬自分の耳を疑った。

剣山やミュウと同じ力を持った奴がまだいると言っのか。

「……それでそいつは今何処に居るんだ？」

「もうすぐこの部屋に来ると思うんじゃないが……」

ふむ……一体どんな奴なのだろう。

工学部に入るくらいだから、葉加瀬達と同じくマッドサイエンティストの類か？

それとも、まったくと言って良いほど全然違うのか……。

「ッ！ マスター、熱源反応がこちらに近づいてきます」

「何だと？」

学園内で熱源反応……もしかして例の新しい研究員か？

「……段々と、音がこちらに近づいてきます」

「不気味じゃ……」

何か、飛行機が離陸するような音がこちらに向かって近づいてくる。……って、校内で飛行機の音がすること事態がおかしい。

「うわっ!？」

「こんなにちわッ……わわっ!」

部屋の扉を突き破って入ってきたのは、変な乗り物に乗った男だった。

しかもブレーキが利かなかったのか、壁に激突してめり込んでいる。

あえて言わせてもらおう、変人だ。100%変人だ。

「だ、大丈夫かね？（汗）」

「ご、ご心配は無用ツス。ちよつとカスリ傷が出来ただけツスから」

あの激突でカスリ傷だけとは……剣山とミユウと同じ力を持っているだけあって、あまり普通の奴じゃないな。

それにこの趣味の悪い乗り物……ますます普通じゃない。

「何だこの変な乗り物は。貴様が作ったのか？」

「そうツスよ。自転車をベースにバイクエンジンや、その他もろもろの機械を取り付けて速度を上げてみたんスけど、大失敗だったツスね」

工学部に入るくせに、頭が悪すぎではないだろうか。

普通自転車にバイクのエンジンは積まないだろう。

この男……葉加瀬達とは少し違った同類かもしれん。

「コホン。それでは君、改めて自己紹介をしてくれんか？」

「はいはい。アチシは麻帆良大学工学部に新しく入る事になった多良・スミスと言う者ツス。以後、よろしく願いますツスよ」

多良・スミスと名乗った男は、間近で見ると、ますます変人だった。特に服の上に纏っている継ぎ接ぎだらけでヨレヨレになっている白衣は、ほぼ全身にポケットが付いていて異様だった。

また、瞳の色も緑色なので、一層異様さが増している。
この男に合っている生物は……例えるなら蜘蛛かもしれない。

《マスター、この人からも……》

《ああ、剣山やミユウと同じ力を感じる。じじいの言った通りだな》
「おっ！ 珍しい人型ロボットツスね。本当に人間みたいツス。名前は何と言っただス？」

突如目を光らせた多良は、茶々丸にすり足で近寄り、舐めるように観察した。

おい、あまり汚い目で茶々丸を観察するな。

「か、絡繰茶々丸と言います」

「絡繰茶々丸ツスカ。ほおゝほおゝ……」

「あ、あの……」

まさか茶々丸がこんな変態男に押されるとは。

まあ確かにこの男、見た目はかなりインパクトが強い。

茶々丸が押されるのも無理はないかもしれない。

幼い子供が見たら泣くぞ、きっと。ぼーやなんか夜眠れないかもしれない。

「ふむふむ……見れば見るほど素晴らしいツスね。是非、開発者と一度会ってみたいツス」

「は、はあ……」

何か、葉加瀬達と会わせてしまったらMS同盟が誕生してしまいそうだな。
メッサーサイエント

それこそ、世界がひっくり返ってしまいそうで不安だ。

「おい、あの男を工学部に入れるのは止めた方が良くないか？」

「しかしのお……彼の技術力はかなりの物じゃし、野放しにしておくのは勿体ないんじゃない。高い能力を生かすために、ここで働いて貰った方が無難じゃろ。それに剣山君とミユウ君と同じ力を持っているなら、もしかしたら知り合いかもしれん」

じじいの言っている事は一理あるが……この男、本当に大丈夫なのだろうか。

「さてエヴァンジェリン。彼を工学部にある生活部屋と研究部屋にまで案内してやってくれんかの。部屋番号はこれじゃ」

「何だと？ 他の奴等にやらせれば良いだろうが！」

「生憎この時間帯はどの先生も暇が無いんじゃない。道案内を宜しく頼むぞ。フォフォフォ」

くそっ！？ じじいめ……。

夜には背中に気を付けておけよ。

「おい、貴様を今から部屋に案内するから付いてこい。それと！手に持つてるチェーソンは何だ！ 茶々丸をどうする気だ！？」

「いやいや……別に何も」

油断もスキもありゃしない。

明らかに茶々丸を分解する気満々だったな、アイツは。

「茶々丸、今後、あの変態にあまり一人で近づくなよ」

「はい、マスター」

一応茶々丸にも注意深く念を押しておく。
分解なんかされたらたまったものではないからな。
さて、さっさとじじいからの用件を済ませるか。

「工学部の方に行くぞ。早く来い」

「はいはい。でもちよつと待ってくれッス」

多良があの変な乗り物を持ち上げたかと思うと、白衣のポケットにそれを押し込んだ。

ドンドンとポケットに収納されていく姿を見て、私、茶々丸、じじいが啞然とした。

「よし！　じゃあ行くとするッスよ」

「ちよつと待て！！　そのポケットはどんな仕組みになってるんだ！？　物理法則と言う物を貴様は知っているのか！？」

未だに呆然としている茶々丸、じじいを放っておいて、私が代表で先程の事態を訊いた。

私が静かに体を震わせていると、多良が不適にフツと微笑んだ。

「それは……大人の事情ッス。ウヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

気味悪い笑い声を放ちながら多良は部屋を出て行った。

私は再び啞然となった。

「何なんだ……あいつは……」

私達が正気に戻ったのはそれから数分経った後だった。

ああ……変な奴が来たもんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9504c/>

らいふ いず りぼ～ん

2010年10月28日13時54分発行